

## ユーラシア古語文献の文献学的研究

### NEWSLETTER

No. 12 2005/9/20

## 目次

研究会報告の要旨	1
第 22 回研究会報告 - 1	2
第 22 回研究会報告 - 2	4
次回研究会の開催予定	8
編集後記	8

## 研究会報告の要旨

2005 年 7 月 23 日 (土) に京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター (羽田記念館) で開催された第 22 回研究会の報告要旨を掲載します。

## 第 22 回研究会報告 - 1

### 「古代イタリア半島・サベル諸語の最上級形式について」

西村 周浩 (米国 UCLA)

サベル諸語は、印欧語族の分派であるイタリック語派に属し、以前はオスク・ウンブリア語群という名でよく知られていた。多くの言語学的特徴を共有し、古代イタリア半島中南部の広い地域で話されていた。その資料は、碑文という形で今に伝わっている。

サベル諸語は、文字に関して独特な歴史をもっている。多くの言語は、近隣のエトルリア語を通じて文字を獲得した。その後いくつかの修正が加えられ、言わば半土着という形で発展した文字体系は、英語でネイティヴ・アルファベットと呼ばれている。文字の方向は、右から左であるケースが多く、いわゆる牛耕式が用いられることもしばしばある。このネイティヴ・アルファベットで書かれた資料の転写は、一般に太字で行われる。後には、ローマの政治的・文化的優位によってもたらされたラテン語のアルファベットも用いられるようになる。このラテン・アルファベットで書かれた資料の転写は、一般にイタリック体で行われる。さらに、イタリア南部では、ギリシア語の影響が強かったため、かなりの数の資料がギリシア文字で書かれている。その場合の転写法は、ギリシア文字による。

こうした地理的な広域性、文字受容に垣間見られる話者たちの苦労にもかかわらず、サベル諸語資料の量は決して豊富とは言えない。例えば、イタリア中東部の南ピケーヌム語の資料は、数行程度の碑文が約 30 点あるだけである。また、比較的豊かな資料を有すると言われる中南部のオスク語においてさえも、300 点程度の碑文が残っているに過ぎない。そのため、こうした少ないデータを分析する上で重要な鍵となってくるのが、近隣の大言語であり、膨大な資料を残すラテン語である。ラテン語は、サベル諸語と同じイタリック語派に属するため、注目すべき共通点を数多くもっている。ラテン語から得られるこうした知識を活用しながら分析を行うというのが、サベル諸語研究の基本的かつ現実的なあり方である。

本発表では、言わばそのケース・スタディーという形で、サベル諸語が伝えるいくつかの最上級形式を材料に、その歴史言語学的な成立過程について議論を行った。

サベル諸語における最上級の形成法は、ラテン語と同様、起源的に *\*-mo-* という接尾辞がベースになっている。この接尾辞 *\*-mo-* に直接起源をもつ最上級の例としては、イタリア中部で話されていたウンブリア語の *promom/prumom/prumu* ‘first’ (< *\*pro-mo-*), *somo* ‘topmost’ (< *\*sup-mo-*) などが挙げられる。また、接尾辞 *\*-mo-* の変種として、*\*-tmmo-* が再建される最上級形式もある。例えば、オスク語 *últiumam* ‘furthest’ (< *\*h<sub>2</sub>ol-tmmo-*), ウンブリア語 *hodomu* ‘lowest’ (< *\*ǵ<sup>h</sup>om-/\*ǵ<sup>h</sup>omi-mmo-*) などが挙げられる。以上の例を見ると、これら二つの接尾辞 *\*-mo-* と *\*-tmmo-* は、一般的に時間や空間の意味をもつ語幹に付加されていることが分かる。これら以外にも、ラテン

語では、*īnfimus* ‘lowest’ という最上級形式に、\**-m̄mo-* という接尾辞が再建される。ただし、この\**-m̄mo-* が単独でサベル諸語にも用いられていたかどうかについてはよく分からない。この接尾辞\**-m̄mo-* は、ラテン語で一般的に再建される複合的な接尾辞\**-is-m̄mo-* の後部要素で、例えば、*maximus* ‘biggest’, *proximus* ‘nearest’ のような例は、この\**-is-m̄mo-* に遡るとされる。こういった先行研究での知見を踏まえた上で、本発表は、とりわけ二つの点を明らかにすることを目標とした。一つは、サベル諸語の材料から、さらに別種の\**-is-mo-* という複合的な接尾辞が再建可能ではないかということ、二つ目は、\**-is-mo-* とともに、\**-is-m̄mo-* もやはり並存していたという点である。

まず、第一の課題である接尾辞\**-is-mo-* の再建に関しては、イタリア中部のパエリグニ語に見られる *prismu* ‘first’ を出発点とした。*-s-* と *-m-* が隣り合っていることに焦点を当て、サベル諸語の音変化の歴史を考えた際、それらの隣接が起源的なものであることを指摘した。つまり、*-s-* と *-m-* の間に何らかの母音が介在しており、それが音変化の過程で脱落したというのではなく、元々 *-s-* と *-m-* が子音連続を形成していたという考え方である。これが正しければ、パエリグニ語の形式に、接尾辞として\**-is-m̄mo-* を想定することはできない。なぜなら、そこでは、*-s-* と *-m-* の間に母音的な要素 *-m̄-* が介在しているからである。ついで、同様の手法で、オスク語 *maimas* ‘largest’、ウンブリア語 *nuvime* ‘newest, latest’ の分析を行った。これらは、*prismu* と違って、*-s-* が *-m-* の前に見られないが、*-m-* の前での *-s-* の脱落は、サベル諸語資料が記録され始めた時期、つまり紀元前6世紀頃には、すでに進行中であつたと考えられる音変化である。こうした事実を踏まえると、オスク語・ウンブリア語の例に接尾辞\**-is-mo-* を再建することに特に問題はないと言える。

第二の目標として掲げた疑問、つまり、接尾辞\**-is-mo-* と並んで\**-is-m̄mo-* もサベル諸語に存在したかどうかに関しては、まず、オスク語 *nessimas*, *nesimum*, *nesimois*、ウンブリア語 *nesimeī* ‘nearest’ を取り上げた。というのも、これらの例は、従来、接尾辞\**-is-m̄mo-* に遡ると考えられてきたからである。しかし、これらの例に対応する比較級が、オスク語に *nistrus* という形で残されており、形態的に接尾辞\**-tero-* に遡る。この接尾辞をもつ比較級は、対をなす最上級形式の接尾辞として、上でも見た\**-m̄mo-* が通常用いられる。したがって、オスク語・ウンブリア語の形式に\**-is-m̄mo-* を想定することは合理的ではなく、本発表の第二の問題提起の議論からは除外される。一方、印欧祖語の語根\**uelH-* に基づき、‘strongest, greatest, best’ のように幅広く肯定的な意味をもち、人名としてもよく用いられる最上級形式は、接尾辞として\**-is-m̄mo-* が再建される根拠を強く示している。具体例としては、オスク語 *ualaemom*, *valaimas*、南ピケーヌム語 *uelaimes*、そして、近年、南イタリアの Tortora で発見された碑文に見られる *φολαισυμος* という形が挙げられる。特に、*φολαισυμος* は *-σ-* と *-μ-* の間に母音を伴っており、これが\**-is-m̄mo-* の母音的な要素 *-m̄-* の存在を裏付けていると言える。

サベル諸語に、最上級接尾辞として\**-is-m̄mo-* が再建されるとしたら、先に議論した接尾辞\**-is-mo-* とはどのように共存していたのだろうか。ここでヒントとなるのが、ラテン語の最上級接尾辞に見られる形態的な多様性である。ラテン語の最上級は、カテゴリーとして一気に成立したのではなく、長い時間をかけて少しずつ形成されていったと考えられる。特に、「大」「小」のように、いわゆる“bipolar”で“gradable”な意味をもつ形容詞語根は、比較的早い段階で最上級の意味をも

つ形式が作られた。それが、パエリグニ語 *prismu* ‘first’ であり、オスク語 *maimas* ‘largest’ であり、ウンブリア語 *nuvime* ‘newest, latest’ である。これらは、それぞれ、原級において、‘last’, ‘small’, ‘old’ と対をなす。この種の意味をもつ形容詞語根からは、接尾辞 *\*-is-mo-* によって最上級が形式された。一方、語根 *\*uelH-* から派生した形容詞は、上の三つに比べて、“bipolar, gradable” と言うよりも “qualifying” であると言える。したがって、*\*uelH-* から派生した最上級形式は、*prismu*, *maimas*, *nuvime* とは異なる接尾辞によって形成された。それが *\*-is-mmo-* である。

## 第 22 回研究会報告 – 2

### 「史料としてのシュメール語王碑文」

前田 徹 (早稲田大学文学学術院教授)

今回の発表では、文献からどのような事実を読み取るかの問題について、シュメール語資料の中でも王碑文を中心に述べる。この作業の前提にあるのは、シュメール語碑文は「知り得た事実を単純に書き記した」(Collingwood 1945, 11) のでなく、碑文作成の作法が存在し、事実を選択して記述したという認識である。以下において、すでに論文等で発表したものを含め(前田 2003、Maeda 2005)、具体的な事例を引きながら考えたい。その分析視点を図式化すると、個々の碑文の内的な分析、その場合シュメール語文法と記述内容の解釈という二つが考えられる。内的な分析の一方で、外的な条件も考慮しなければならない。例えば、王の自己表現の手段としては王碑文と王讃歌や年名があり、これら三種の相互関係によって、すなわち外的な条件によって王碑文の内容や機能が規制される面があるということである。

まず、文法に関して、シュメール初期王朝時代の碑文において、シュメール語動詞 *a~ru* 「奉納した」は、ときに、奉納の目的である「—の生命の故に(長寿を願って)」を受けた接中辞をとる(ABW, En 1, 19; Ur: Aan 5; Ur: Aan 3)。これは、王の臣下や王子が王の長寿を願うという、奉納者が上位の者のために奉納する場合に限られる。つまり、この接中辞は機械的に書き込まれるのではなく、奉納者が、下位であることの卑下や上位者に対する謙讓の意識を表示したい場合に現れる。さらに、某の妻とされる女性が家族のために奉納する場合も、この接中辞は現れる(ABW, AnUr 16)。妻の奉納例は、シュメール初期王朝時代の家族制度において、すでに家長権が確立していたことの傍証になる。

次の例は、文法解釈の相違によって、内容理解が 180 度異なる例である。初期王朝時代ラガシュの支配者エンメテナは対ウンマの国境争いを過去に遡って回顧した碑文を残す(ABW, Ent 28)。この碑文のエンメテナ自身の治績に関する部分の iv 19~21 において、「ウンマの支配者イル」のあとに書かれた文法要素 *-a* を能格もしくは行為者格 *-e* の母音変化と捉え、全体の文意を「イルはさらに呵責のない攻撃を加えてきた。(略) エンメテナは彼とのあいだで友好的に協調することを模索

し、使者を送った。この交渉は明らかに何の結果も見ずに終わった」のように解釈する場合がある (Bauer 1998, 472-3)。しかし、-a をそのとおりに位格に取り\*1、その前の文章「その運河のことで (エンメテナが) 使者をイルのもとに送った」に接続して、エンメテナが使者に示した口上「ウンマの支配者イルに (言え)」と解釈できる。ラガシュの言い分によれば、神々が決めた聖なる境界をウンマが侵犯してラガシュに侵入したことがそもそもの発端であり、エンメテナとイルとの間で新しく締結される協定には、ウンマの謝罪が不可欠なのである。この部分はけっしてウンマの新たな侵攻を記すのではなく、それとは逆にラガシュに優位な協定締結に至る過程を記すのである。

第三に、碑文の内容に関わって、「国土の王」ルガルザゲシの碑文を示す。王碑文は、通常、王の二大責務、外敵を防ぎ、内にあっては豊饒と平安を維持することに合わせて、功業としての戦争勝利や神殿建立・城壁建設・運河開削を記す。しかし、このルガルザゲシ碑文では、彼が行為者であるのは、ただ一ヶ所、末尾近く、「ルガルザゲシ、ウルクの王、国土の王が、彼の主エンリル神のために、ニップル市において大いなる供物を捧げ、そして甘き水を注ぐ」という、エンリル神に王権の永続と彼の長寿を願う場面だけである。この碑文は、前半でエンリル神が行為者として、ルガルザゲシに国土の王権を授与すること、後半で「国土の王」になったルガルザゲシが、その感謝の念をエンリル神に伝えるという二部構成である。このように、王権の授与に焦点を当てた碑文であるので、通常の王碑文とは異なり、功業としての戦争勝利を記さない。したがって、この碑文から、シュメール諸都市の征服過程を再構成することは出来ない。

より技巧的な表現がサルゴン碑文に見られる。サルゴン碑文 (RIME 2, Sargon 11) は、王号「全土の王」に密接不可分な領域「上の海 (=地中海) から下の海 (=ペルシア湾) まで」をそのまま表現するのではなく、それに代えて、中心であるシュメールを「34度の戦いに武器を打ち下ろし、海 (=ペルシア湾) に至るまで、(シュメール諸都市の) 城壁を壊した」と表現し、一方の端であるペルシア湾については、ペルシア湾を通じて交易した「メルッハの舟、マガンの舟、ディルムンの舟がアッカドの港に係留した」と書き、もう一方の端である地中海については「サルゴン、王たる者が、トゥトウルにおいてダガン神にひれ伏し、禱りを捧げた。(ダガン神は)、マリ、ヤムルティ、エブラ、杉の森、銀の山までの上の国土を彼 (=サルゴン) に与えた」と記す。サルゴンの治績において最も重要なシュメール征服は書かれているが、それに次ぐと思われるエラム征服を、この碑文は記さない。サルゴンの治績における重要度でなく、地理的に「上の海から下に海まで」に合致した治績を選んで記したのである。逆にこの地理的な基準からして、他の碑文や年名に誇示されるエラムやシムルムの遠征は、その域外であるので、この碑文には書かれなかった。

別のサルゴン碑文 (RIME 2, Sargon 1) は、通常使用しない王号が書かれた特異な碑文である。つまり、サルゴンの正式な王号は「全土の王」であり、ルガルザゲシのそれは「国土の王」であるが、この碑文では、「(サルゴンは) ウルクを破壊し、その城壁を崩した。ウルクとの戦闘に勝利した。ウルクの王ルガルザゲシを戦闘中に捕らえ、くびきをかけ、エンリル神の門まで連行した。アッカドの王サルゴンは、ウルとの戦闘に勝ち、市を破壊し、城壁を崩した。(略)。国土の王サルゴンに、

\*1 研究会の席上で、森若葉氏から、初期王朝時代に人名に位格がおかれる例があるのか、これは属格ではないかという批判を受けた。森氏に従って、属格にとり、与格が省略された形と訂正する。

エンリル神は敵対者を与えない（唯一の王とした）。上の海（＝地中海）から下の海（＝ペルシア湾）までエンリル神は彼に与えた」のように、サルゴンはアッカド市の王とされ、ルガルザゲシはウルク市の王と書かれる。そしてサルゴンがシュメールを征服すると、「全土の王」でなく、「国土の王」となったと語られる。

この碑文から、「サルゴンは「アッカド市の王」として、シュメール諸都市に対する征服と服従を求める活動を開始した。その（征服の）のち「国土の王」となった。続いて、彼は、主要な交易路を確保するために、北や東へ勢力を拡大した。（略）。それによって、サルゴンは「全土の王」と名乗った」と理解される場合がある (Franke 1995, 832)。

しかし、この碑文は、サルゴンが国土の王ルガルザゲシを破った史実を、アッカド市の王サルゴンがウルク市の王ルガルザゲシを破ったことで、より上位の王権「国土の王」を獲得したように物語るのである。同等な都市支配者が相争い、上位の領域国家の王になったという筋書きである。これは、シュメール文学のひとつのジャンル「論争詩」のモチーフを借りた表現である。したがって、王号に関しては史実を伝えていないと言うことが出来る。

この碑文が論争詩的なモチーフで語られていることは、サルゴンとルガルザゲシが生きた時代を勘案しても裏付けられると思う。『シュメールの王名表』ではサルゴンの治世は56年とされ、シュメール征服以後の治世が10年未満であった可能性が高いので、シュメール征服以前に46年以上在位していた計算になる。この期間は、ルガルザゲシの治世が25年とされるので、ルガルザゲシが即位してシュメールの統一を果たす全期間よりも長くなる。つまり、ルガルザゲシが南のシュメールで即位し、シュメールの統一に邁進し、「国土の王」を名乗るのをサルゴンは見続けたことになる。その間、サルゴンもキシユやアクシャク勢力が弱体化するなかで、北のアッカド地方を統一する行動をとっていた。この前提がなければサルゴンのシュメール遠征はあり得ない。南を統一するルガルザゲシに、サルゴンは好敵手の姿を見たであろうし、ルガルザゲシが「国土の王」を称すれば、サルゴンも都市国家を越える同等の称号を編み出したはずである。それが「全土の王」である。つまり、「全土の王」はルガルザゲシの「国土の王」に対抗して生み出された王号と考えられる。都市国家から領域国家への転換を主導する可能性はルガルザゲシだけでなく、サルゴンにも存在したのであり、その主導権争いが、ルガルザゲシの「国土の王」とサルゴンの「全土の王」に反映する。最終的にどちらの王がメソポタミアの統一を主導するかという雌雄を決する戦い、それがサルゴンのシュメール遠征であろう。このような政治過程が考えられるので、サルゴンは、シュメール遠征以前に、王号を「アッカド市の王」から「全土の王」に変えており、サルゴンが「国土の王」を名乗る必然性は全くない。

往々にしてシュメールのような古い時代には高度な修辞法などありはしないで、知り得たことを単純に書き写すだけと判断しがちである。しかし、今回取り上げたエンメテナの回顧碑文、ルガルザゲシの「国土の王権」授与碑文、それにサルゴンの2つの碑文、これらから、王碑文は事実を単純に書き取ったのではなく、碑文を書く目的やその内容によって、碑文独自の書く作法、高度ではないにしても修辞法が意識されたことを知り得る。王碑文を史料として利用するときは、この書く作法・修辞法を考慮しなければならない。たとえば、サルゴンのエラム遠征のように、王の事績が碑

文に書かれていないからといって、その碑文が造られた後に実施されたとは断定できない。碑文には出来事・事実を選択する書く作法があり、それに該当しないために書かれなかったと考えられるからである。

最後に、王碑文を王が自己を表現する手段として捉えた場合、王碑文の他に、年名が前 2380 年頃に使用が開始され、王讃歌がウル第三王朝成立の前 2100 年に生まれた。ウル第三王朝の王は自己を王碑文、年名、王讃歌で表現できたのであり、その点が初期王朝時代やアッカド王朝時代の王とは異なる。当然、王碑文の役割や機能は、ウル第三王朝時代とそれ以前では異なるはずである。この点は、なおこれからの研究を待たねばならないが、一つ言えることは、初期王朝時代やアッカド王朝時代には、王の治績の多くをまとめた碑文が存在したが、ウル第三王朝時代になると、神殿建立や外征の成功を個別的に記述する内容であり、全治績を記述する碑文はない。功業の集積として王の偉大さを讃えて全治績を王碑文に書く代わりに、王の存在自体が偉大であるとする王讃歌が作られたのであろう。

## 略号

- ABW: H. Steible, *Die altsumerischen Bau- und Weihinschriften*, Stuttgart, 1982.  
RIME 2: Douglas R. Frayne, *Sargonic and Gutian Periods (2334–2113 BC)*,  
(The Royal Inscriptions of Mesopotamia, Early Periods vol.2), Toronto, 1993.

## 参考文献

- Bauer, J. 1998: J. Bauer, R. K. Englund & M. Krebernik, *Mesopotamien. Späturuk-Zeit und Frühdynastische Zeit, 1* (OBO 160/1), Göttingen.  
Collingwood, R. G. 1945: *The Idea of History* (ed. by T. M. Knox), Oxford (コリングウッド著 小松茂夫他訳『歴史の観念』紀伊國屋書店 1970 年) .  
Franke, S. 1995: “King of Akkad: Sargon and Naram-Sin,” in J. M. Sasson (ed.), *Civilizations of the Ancient Near East*, New York, 831–841.  
前田徹 2003: 「エンメテナの回顧碑文」『西洋史論叢』25, 3–11.  
Maeda Tohru 2005: Royal Inscriptions of Lugalzagesi and Sargon, *Orient* 40, 3–30.

## 次回研究会の開催予定

### 第 24 回研究会

(「古代世界における学派・宗派の成立と<異>意識の形成」研究会と共同開催)

日時: 2005 年 9 月 30 日 (金) 13:00 ~ 14:30

場所: 京都大学文学部新館第 6 講義室

「An Indo-European Custom of Sacrifice」

**Norbert Oettinger** (エアランゲン-ニュルンベルク大学教授)

### 第 25 回研究会

日時: 2005 年 10 月 1 日 (土) 14:00 ~ 16:00 (終了次第、懇親会)

場所: 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター (羽田記念館)

「Perfect and Related Categories in Proto-Indo-European: Some New Thoughts」

**Norbert Oettinger** (エアランゲン-ニュルンベルク大学教授)

---

## 編集後記

COE 31 研究会ニューズレター第 12 号をお届けいたします。研究会等、今後も活発に活動して参ります。皆様のあたたかいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

## 連絡先

「ユーラシア古語文献の文献学的研究」(事務補佐員: 稲垣 和也)

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科言語学研究室

Tel & Fax: 075-753-2862 E-mail: [eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp](mailto:eurasia-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp)

Web page: <http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/eurasia>